

## 「教育勅語」を奉ずる民間人校長は、なぜ学校を投げ出したのか？

### 戦後、青少年の犯罪は激増したのか？

かつて「イデオロギー」という言葉は、社会主義思想や左翼運動に対して投げつけられた言葉でした。

しかし、「イデオロギー」の定義を「先にできあがっている結論に合わせて、都合の良い事実を拾い上げて組み立てられた論理」とするならば、今日ではむしろ保守的な主張の中に「イデオロギー」の色彩を感じるものが少なくありません。

たとえば、「いじめ」や青少年犯罪など今日のような教育課題をめぐって、その原因は「戦後教育が間違っていたからだ」とし、戦前の教育や教育勅語を評価・賛美する主張があります。

2002年に、元文科大臣の中山成彬氏が中心になってまとめた自民党森派の「教育基本法改正への5つの提言」も、こう述べています。

教育勅語が謳いあげている『目指すべき教育のあり方』が、けっして間違ったものでなかったことは明白であろう。むしろ、こうした指針がなくなったことが現在の教育の荒廃を生む一因となったと理解いただけるのではないだろうか。

では、本当に「教育勅語のような指針」がなくなったために、「いじめ」や青少年犯罪などの「教育の荒廃」が起きているのでしょうか。教育勅語を復活させれば、それらの問題は解決するのでしょうか。

戦前には「犯罪白書」のような統計がないため、客観的な比較は困難です。しかし、戦前においても多くの青少年犯罪が発生していたことは、管賀江留郎氏がその著書「戦前の少年犯罪(2007年築地書館)」で新聞報道をもとに統計的に明らかにしています。

帝国軍隊の新兵への「しごき」も、疎開児童に対する「いじめ」も、教育勅語の下で起きていたことです。

一方、「戦後の方が青少年犯罪が増加した」というデータはあるのでしょうか。青少年犯罪はたしかに戦後の一時期増えましたが、全体にはけっして「戦後の方が増加した」といえる状況ではありません。今日、

日本は主要先進国の中では青少年の犯罪発生率のきわめて低い国なのです。



これらを見る限り ▲戦後の青少年犯罪発生件数の推移「青少年犯罪は戦前には少なく、戦後になって増加した」という主張を裏付けるデータはありません。

「いじめ」や青少年犯罪などの問題は、情報化や地域社会の変化、価値観の多様化など様々な社会的要因が子どもたちに投影されている面も軽視できません。

はたして、価値観の多様化した現代社会に「教育勅語を復活させれば『教育荒廃』は解消される」ものなのでしょうか。

この「仮説」の可否を、ある高校で起きた事件をもとに検証してみたいと思います。

### 私立皇學館高等学校

皇學館高等学校は、三重県伊勢市にある神道教育を理念とする私立の学校です。

生徒たちは授業中に「教育勅語」を書き写し、暗唱します。これこそが、まさにこの学校の特色であり、教育理念です。



▲皇學館高校

皇學館高校の前校長・大島謙

氏は学校のホームページで次のように述べていました。

「教育勅語」に端的に具現化された伝統的な価値観＝道徳観が否定された所に、個人の権利を高唱する人権思想が浸透すれば結局はどうなるか。現在の日本社会の状況が、何より雄弁にその結果を物語っているでしょう。(「道徳と人権」)

大島氏は投資会社社長を経て、2003年に三重県初の民間人校長として県立白子高に赴任します。その後、2008年に皇學館高校長に就任しました。

大島氏はこの間、「いじめ」や道徳教育について精力的に主張を続けます。

たとえば昨年8月に三重県で開かれた「いじめから子供を守ろう！ネットワーク（注）」主催のシンポジウムでは、こんな基調講演を行っています。

（注：「幸福の科学」の関連団体と言われる）

いまや学校はいじめの温床になりつつあり、改革をしなければならぬ。ゆとり教育、子供中心主義の教育は、わがままな野生の人間をつくる。

校長がいじめをなくすプロジェクトリーダーになり、学校で起こっているいじめは、絶対に許さないと子供達に伝えていくことで、いじめは必ず解決できる。（同ネットメールマガジンより）

大島氏はこの他にも各所で、「戦後教育がいじめの元凶」であり、「教育勅語に具現化された伝統的な価値観＝道徳観」を復活させれば「いじめは必ず解決できる」とする講演を繰り返します。

言うまでもありませんが、「教育勅語」がないからといって、全国の学校が人権や道徳についての教育を行わず、「いじめ」の対策を何も講じていないなどということはありません。

どの先生も、「いじめ」に出会えば生徒たちと何度も話し合い、時には怒り、悩み、暗中模索しています。

たしかに「教育勅語を書き写し、暗唱する」ことはしていません。それは、このような方法は現実の子どもの変容に効果がないからです。「教化」ではあっても、「教育」ではないからです。

「いじめ」問題ひとつをとっても、その背景にある子どもたちの抱える課題は様々です。一定の道徳観を注入すれば、それで解決できるものではありません。

事実、大島氏の主張は、ある事件によって厳しく検証されることになるのです。

## 皇學館で起きた「いじめ自殺」

この3月、共同通信はこんな記事を配信しました。

三重県伊勢市の私立皇学館高校1年の男子生徒（16）が同級生からいじめを受けていたという内容の遺書を残し、自宅で自殺していたことが5日、分かった。遺書にはいじめを受けた相手として同級生7人の名前も記してあり、同校は生徒から事情を聴くなどして調査する。同校の中村貴史教頭が明らかにした。

遺書はA4判の紙1枚で、「暴言、暴力、嫌がらせを浴びせられ、精神的に嫌になった」などと書かれていた

「戦後教育」を指弾し、「教育勅語によって教育荒廃は解決する」と主張してきた学校で起きた事件です。大島氏はこれをどのように説明したのでしょうか。

ところが事件の解明も済まないうちに、当の大島謙校長は、突然に退職してしまうのです。

皇学館高校長が退職「精神的に疲れた」

いじめを訴える遺書を残して1年の男子生徒（16）が3日に自殺した三重県伊勢市の皇学館高は31日、大島謙校長（61）が同日付で退職すると発表した。「精神的、肉体的に疲れた」と話しているという。（2009.4.1毎日新聞）

保護者側は「何ら問題が解決していない」として、学校の対応を批判している最中の退職です。「学校を投げ出した」とのそしりを免れることはできません。

彼はその著書「民間人校長奮戦記（2004年・草思社）」で公立学校を「異界」と呼び、教職員を「失敗しても反省がない。誰も責任をとらないし、とるつもりもない」と批判していたはずですが。大島氏のこれまでの主張は何だったのでしょうか。

さすがに、これ以上持論を展開できなくなったのでしょう。今、皇学館高校のHPから大島氏の文章はすべて削除され、一切読むことはできなくなっています。

## 教育に「特効薬」はない

「教育勅語によって教育荒廃は解決する」という仮説は、少なくとも皇学館においては破綻したことになります。「私学」「民間人校長」「教育勅語」、そのいずれも「特効薬」ではありませんでした。つまり、「イデオロギー」に過ぎなかったということです。

もちろん皇学館のケースは一例にすぎません。これだけですべてを結論づけるわけにはいきません。

しかし、私はそもそも「こうすれば教育問題は解決する」などと軽々に断言する主張を信じることはできません。教育とは、そんなに簡単なものではないはずです。「いじめを行った生徒を出席停止にすればよい。これで問題は解決する！」と得意満面に語った、教育再生会議の渡邊美樹氏も私は信用しません。

故・長洲一二元神奈川県知事はかつて、「教育に特効薬はない」とした上で、このように提起しました。

「教育をとりまく今日的な難問の解決のためには、何より子供たちを一番知っている親と教師、そして地域の大人たちが、目の色を変えて論議を重ね、手を携えて新しい知恵と工夫を持ちよるしかないのです」

はたして大島氏と長洲氏のどちらが、教育の本質をとらえていたのでしょうか。